

<Part 1 修正部分>

p. 106 の最初の段落

亀岡に関わる伝承で最も人気なのは「丹の海」の開拓であろう。次の田中（1941）『丹波の傳承』（亀岡の治水: pp. 81-82）では出雲系の伝承が重視されている。

注記： 次の、「この伝承」ではじまる文は削除する。

p. 106 の「引用～亀岡の治水」と、この直後の「筆者の母校」で始まる段落の間に挿入

この引用では出雲系の鞆山神社の伝承が採用され大国主命が主人公になっている。本論では後述のように、秦氏（大山咋命）が主体で先住の出雲族が協力したと筆者は考えている。

p. 110 の「引用～上田の図表の説明」直前の行

上田は図表（本報告の図 2）の示す意義を端的にまとめており、その文すべてを次に示す。

p. 112 の「国立国会図書館デジタルコレクション」で始まる第 2 段落の末尾に追加。

井上（1995）は、これをそのまま踏襲している。

p. 113 の「II 桑田郡式内社一覧」の直前に、次の新たな節 I.3 を追加。

### I.3 大山咋命と大国主命の上下関係

『亀岡神社誌』『桑田神社』（pp.210-211）の内容は、前掲の『神祇志料』と趣が異なる。

—— 引用～『亀岡神社誌』桑田神社

大山咋命は大国主を従えてこの地に来られ、土民を督励し、相協力して岩を穿ち、石を割り、土を盛って、山本浮田の峽を切り拓き、山城葛野へ水を流し陸田に干拓し、後、大山咋命は鋤を取り、大国主命は鋤を取って、土地の住民とともに農耕に励んだ。当時、この地を田庭と呼ばれていたそうで、丹波はこの田庭より名付けられたと思われる。

引用～おわり ——

この引用では大山咋命は大国主命より上位にある。祭神が大山咋命であり、桑田神社が松尾系に属することに対応している。『神祇志料』をまとめた栗田寛は東京帝国大学教授で近代的歴史学の確立に寄与したが、水戸学的尊王精神を持ち、皇室を中心とした国体を歴史的に証明しようという思いがあり、それが大山咋命を大国主命の上位に置く社傳に対し、「大山咋神は所謂<sup>いわゆる</sup>、お供八神の一也」と上から目線で注記したと筆者は考えていたが、『神祇志料』だけでなく、愛宕神社縁起にも同様の記述があった。ただし、維新後に書き換えられた可能性も残る。

前掲の「引用～上田の図表の説明」にあるように、篠村、大堰川沿いの松尾系信仰圏の分布は、秦氏の祭神大山咋命が丹の海干拓の主役に当たることを強く支持するのである。

p. 117のII.2.aの第2段落以降を次の文と差し替えます。共通部分もあるが煩瑣なので一括で次の文に差し替えます。

亀岡市史編さん委員会編(1995)『新修亀岡市史』本文編第一巻の第五章第四節「寺社の文化」(井上満郎担当)の「表 17 桑田郡式内社一覧表」(本報告の表 1)では、蕨田野神社について、祭神をウケモチ・オオヤマヅミ・ノヅチとし、系列を松尾系としており、その出典を「上田正昭『古代村落の成立』、『篠村史』所収」としている。しかし、前述のように上田は根拠を示していないが出雲神系としている(図2)。

この9月末の日曜日、蕨田野神社に出かけた。隣接する大石酒造社長大石博司さんとご一緒して、氏が設置に貢献された稗田阿礼の祠に向かうところで、観光バス立ち寄りスポット大石酒造に絡む観光客が神社の境内に入ったのを大石さんは見かけて、持ち前のサービス精神を發揮し、八幡宮裏に隠れたお宮方面を指して、この奥に伊勢外宮と同じ神さんがお祭りされていますよー、と伝えていた。観光客は見えないこともあって、関心を示さなかった。

大石さんは氏子代表クラスの高齢の方であるが、三神の代表格を保食命と受け取っているのである。三神の並びがそのまま蕨田野神社の祭神の上塗りを反映しているように思われた。

下中編(1981)『京都府の地名』には「蕨田野神社」(p. 369)の社伝が次のように示されている。執筆陣に上田正昭はいない<sup>1</sup>。

—— 引用～蕨田野神社

古代、集落の中心に森を残し、土盛を作り食物や野山の神の霊を祀ったのを発

---

<sup>1</sup> 亀岡市担当者は遠山泰之(亀岡高校教諭)と永光尚(口丹波史談会代表)である。前者は筆者の高校三年時に日本史を教わった恩師であり、後者は友人によれば同級生の父ということであった。筆者は幼くて日本史に興味がなくなぜか授業中よく揶揄われた。

祥とし、和銅二年（七〇九）に丹波国司大神朝臣狛麻呂が土盛の前に社殿を建てたのに始まるという。

引用～おわり ——

この引用については常識的な文脈ゆえに後に再構成されたものと受け取れる。「野山の神の霊」は容易に野椎命のづちのみことと大山祇命おほやまつみのみことに対応しうる。つまりは、地主神ぢぬしが『古事記』に登場する夫婦神の野椎命や大山祇命の神名へと比定されたとみるのが自然であろう。

p. 126 の第 2 段落（G.E.Pro, で始まる）の二行目

筆者（木庭, 2025b）の実測では、平面直角座標値（ $N, E$ ）の精度は……

p. 126 の第 3 段落（表 3, で始まる）の四行目

近の高度は人工的な改変もあり海拔 106m ほどであるが

p. 130 の V.1 のタイトル

V.1 低位段丘の離水と式内社などの進出

p. 131 の最終段落の一行目

海拔高度表示の精度は水平位置よりも多少粗いが、Google Earth Pro の機能を使って、

p. 132 の第一段落内に新たな段落を挿入

.....想定したのである。

本節の観点を言い換えると、低位段丘Ⅲ面は丹の海の湖底面であって、大山昨命によって山本浮田の峽が切り拓かれて後、海拔 112~100m の小幡神社以下八社が進出したと考えたのである。

なお、この観点は後述のように遺跡分布図を調べることで再考を迫られる。

p. 133 の最初の行

市域の発掘資料の情報は市史出版後、かなり更新されていて

pp. 135-136 の V. 3 中川 (2009) による案察使遺跡での「低位段丘」、のおわりの3段落を除いて、段丘面や段丘崖などの地形学用語に「」を追加

中川 (2005, 2009) は、牛松山山麓西方の氾濫原にある K41<sup>案察使</sup>遺跡のトレンチ調査から「水中堆積物」中に鬱陵隠岐火山灰 (10,700 年前) を検出している。そのトレンチに近接しているとする「段丘崖の形成は1万年以前となり、段丘は低位段丘であることが明らかになった。」(中川, 2009: p.8) とする。

現在の河川の氾濫原のそばの崖は現在の河川の侵蝕で生成されたものなので、この観点は誤りと感じるが、氾濫原そばに見える「段丘面」と氾濫原を限る崖が旧氾濫原が段丘化された結果とする場合は問題ない。ただ、「段丘崖の形成は1万年以前」という場合、その「段丘崖」は現在進行中のものであり、やっぱりおかしい。

「左岸域にはいわゆる氾濫原といわれる地域と比高差最大 5m に及ぶ段丘崖

をもつ平坦面があり、現在は水田が広がっている。『新修亀岡市史』(2002)では、低位段丘面として位置づけられている。」(中川, 2009: p. 7) と言う。参考文献欄を見ると、亀岡市史編さん委員会編(2002)『新修亀岡市史本文編』第一巻、とある。これは1995年に出版されている。この「第一章 亀岡の自然環境」(井上, 1995)などを確認したが地形分類図などは提示されていない。中川は「氾濫原上でのトレンチではあるが近接する「段丘崖」を介した「段丘面」は低位段丘に当たるとしたいのであろうか、筆者には理解できないのである。メモ: 中川の用語使用に混乱があり、中川の表現を「」を使って記述したのであるが、読み返してみても、著者が理解できず、新たに「」を追加することになった。

#### p. 136 の V.3 の最終行

掘資料情報を使ってキーサーフェスの観点から地形分類図を提示したい。

#### p. 146 の注 2)の修正

父木庭次守は蕨田野町に隣接する本梅町で昭和 49 (1974) 年 10 月 18 日に、(日本) タニハ文化研究所を立ち上げた。その際の協力者には、日本博物館協会初代会長徳川宗敬、京都大学名誉教授上田正昭などがある。(京都新聞丹波版昭和 49 年 10 月 19 日号「丹波の総合史 30 年計画で編集」)

(以上)